［特別展示］

本学関連史料――要旨

1. スクリバ文庫

日本の近代医学の基礎を築いたドイツ人ユリウス・カール・スクリバの蔵書から成る文庫「Scribasche Bibliothek」である．スクリバは，日本内科学の父エルヴィン・フォン・ベルツ来日の5年後，1881（明治14）年，明治政府により，当時の東京大学に招かれた．この「スクリバ文庫」は，1918（大正7）年にスクリバ遺族により本学に寄贈され，翌1919（大正8）年，これを基礎として本学図書館が開設された．

その公式蔵書印には「Scribasche Bibliothek」と刻印されている．

文庫蔵書は172冊である．スクリバの専門である外科学はもちろん，生理学・病理学・動物学・解剖学・内科学・眼科学・整形外科学・産婦人科学・皮膚科学・軍陣外科学など，じつに多岐にわたっている．最も古い書籍は，1784（天明4）年にドイツ西部フランクフルトと東部ライプチヒで同時出版された外科学書である．当時の日本は10代将軍家治の治世にあり，田沼意次が老中職にあった．次いで古いものは，ドイツ東部ハレで1813（文化10）年に出版された整形外科学書である．また，この文庫にはベルツ執筆の内科学書も所蔵されている．これは1890（明治23）年と1900（明治33）年に東京で出版された．日本での研究診療の成果ともいうべき内科学書であり，日本人患者を診察対象にした指導書である．さらに，1898（明治31）年にベルリンで発行された日本文化研究誌をはじめ貴重な日本研究資料もみられる．スクリバの長男フリッツは，大正・昭和初期に本学のドイツ語教授をつとめた（尚，2020年発行の冊子『日本医科大学スクリバ文庫』所収の年表を参照されたい．）

2. 古書籍

第121回日本医史学会では，前述のスクリバ文庫と共に，済生学舎時代に使われていた教科書類の一部と篤志家より寄贈の古書籍を参加者の皆さんにご覧頂く企画を準備させていただいた．済生学舎の教科書類は，『診法要訣上・下』長谷川泰譯纂，行餘堂，明治14年，『斯泰涅爾小児科1–6』Steiner, Johann著 長谷川泰譯述，行餘堂，明治8–9年，『脚気新説　全』Aitken, Sir William著，長谷川泰譯述，行餘堂，明治4年，『肺炎衝論上・下』Bennett, John Hughes著 長谷川泰譯述，英蘭堂である．寄贈古書籍は『解體新書 初版本』，『重訂解體新書』，『平次郎解剖図』，『蘭学事始』，『パレの実践外科学』，『ベサリウス ファブリカ』といった解剖学の原点としても貴重な歴史的資料である．上記のうち『実践外科学』の筆者，アンブロワーズ・パレ（Ambroise Paré）は「Je le pansay, Dieu le guarist（余繃帯し 神これを癒やし給う）」という格言を残している．我々が学問を深めるためには，専門とする学問の科学的眼力と共にその学者が培う文化的素養，教養が非常に大切であると考えられるが，まさにその格言はこのことを具現している．学会開催の趣旨に賛同して下さり，多くの資料をお貸しいただいた篤志家のご協力など，数々の方々の思いがこもった貴重な資料と，さらには済生学舎の学生が医術開業試験の合格の為，必死に勉強した実像を堪能して頂きたく，ご紹介する．

（文責　第121回日本医史学会実行委員会）